

## 『菅家須磨記』注釈本の展開

妹尾好信

【キーワード】菅家須磨記・須磨記・菅原道真・偽書・紀行・注釈

### はじめに

『菅家須磨記』は、菅原道真が宇多上皇に重用されて右大臣に任官したものの、藤原時平の讒言によって失脚、蟄居の後に大宰権帥への左遷が決まり、都を離れて海路須磨に至るまでの間の心境や周囲の人々の様子が描かれた実録風の読み物である。道真自作と信じられて珍重されてきたのだが、もとより自作説には信憑性がなく、おそらくは近世になって作られた偽書ないし仮託書であることは明白である。

ただし、道真自作を装っているせいも、いかにも古めかしい硬質な文体で書かれ、特異な語彙や耳慣れない表現が随所にちりばめられている。もともとこなれた文章ではない上に、写本で流布したために転写過程での乱れも加わって、非常に難解である。

諸伝本を調べてみると、その難解な文章を読み解こうとする書写者や所蔵者など、この作品の享受者たちの努力の跡が、傍書や欄外

書き入れ、貼り紙などによって窺われる本が多数ある。そして、それにとどまらず、全編に詳しい注釈を施した注釈書と言うべき本も、少なくとも二種類作られていることが判明した。

本稿では、その二種の注釈本を中心に、近世における『菅家須磨記』の注釈・読解研究の足跡をたどってみたいと思う。

### 一 注釈研究の始まり

『菅家須磨記』の成立時期について詳しいことはわからないのだが、現存諸伝本の奥書類から判断すると、享保十三年（一七二八）あたりが最も古い書写の記録である。本書の享受は享保年間から始まったわけで、おそらく成立もそれを遡ること遠からぬ頃と考えてよからうと思われる。

#### 1 壺井義知による振り漢字・傍注・欄外注

本書を早い時期に書写し、流布に大きく寄与した人物として、有

職故実家として知られる壺井義知（明暦三年（一六五七）―享保二十年（一七三五））と、その門人である多田義俊（南嶺）（元禄十一年（一六九八）―寛延三年（一七五〇））の二人が挙げられる。とりわけ、義知は本書を最初に知識階級に紹介した人であると言えそうだ。

義知自筆と見られる写本が内閣文庫に存在し、その本の奥書には、

此一書加州金沢山崎氏或人之許より借写して

且加傍字訖

壺井義知 印

とあって、底本が加賀金沢の川嶋某より借りて写したものであることと、義知が傍字を加えた旨が記されている。

傍字とは主に振り漢字であり、朱書されている。仮名の多い文章なので意味がとりにくいため、漢字を傍書して読解しやすくした処置である。冒頭の四行を掲げると、

昌泰ふたはしらにあたれる・つちのとのひつしの年  
 二月中ころ・ゆくりなきみことのりをかしこまりて・  
 おほいもの申言といへるさへ・身にはおほけなく卑下詞ナリそおもふ  
 へきを・うちのおと大臣を越なんを任ちにん遥に思ひなして・

のようにある（「・」は朱による読点。「おほけなく」に「覆―無―」と漢字を当てただけでなく、「卑下詞ナリ」と記しているのは、注釈を加えたものである。本書全体をみると、「東の雲は曙なんともせざるにも・衣裳をさへさかしまたてゝまうのほる事」（2ウ）とある本文に「詩經」と典拠文献を傍書して示したり、「第七

の御方」（3オ）に「齊世親王」、「左のおと」（3ウ）に「時平公（墨）」、「左大臣時平公（朱）」、「白大夫」（5ウ）に「名春彦」と傍書して人物名を注記するなど、注釈的な傍書がところどころに記されている。

これら傍注の他に、上部欄外に書き入れられた注記も、次の六箇所ある。

- ① 百草無分之中君獨秀ス 匡衡秋蘭賦（「いはけなきよを・思ひはるけんそかなしかるへきわさなるへし」（4オ）に対する注）
  - ② 三善清行諫菅公文在文粹（「清つらのぬしかさく」（5オ）に対する注）
  - ③ 菅公女彈正尹宮之室故謂貧家娘（「貧家の娘」（8ウ）に対する注）
  - ④ 春海元卿者平城天皇近臣巧詞章（「孫元卿」（9オ）に対する注）
  - ⑤ 和氣重氏は医名撰医教一卷（「典葉の史生和氣の重氏」（10ウ）に対する注）
  - ⑥ 兼視王家集 いつまでかわかすまのうらかきりなき雲の上野の岡の雁かね（「上野の岡といふところ」（11オ）に対する注）
  - ⑦ ねぢけたる（「ねぢけたるといへと」（1ウ）に対する注）
- この他、付箋に記された欄外注が次の二箇所ある（傍注もいくつか付箋に記されたものがある）。

⑧ 文章生得業生 共大学寮官也（「文章得業の両生」（1ウ）に対する注）

また、義知筆本には「〇〇イ」と傍書された異文注記も多数あり、他本との校合がなされていることもわかる。前見返しに付箋が貼られ、「墨にて文字付る所ハイ本なり」と記されている。金沢の川嶋氏に借覧して写した本以外の別本も参照したということだ。義知はおそらく『菅家須磨記』に関してはじめて注釈的研究を行った人物と言ってよいが、他本との校合による本文研究もまた最初に手がけたと考えられるのである。

諸伝本の中には義知の奥書を本奥書として持つ本が多数あるのだが、内容のやや異なる数種の奥書が認められる。たとえば、先に示した内閣文庫本の形以外に、次のようなものがある。

I 筑波大学蔵A本等

此一書加州金澤自川島氏傳來之尤殊勝之御記也

義知判

II 蓬左文庫蔵A本等

此一書加州金澤川嶋氏より至來して写とり

ぬ尤殊勝之御記也

朱字傍註義知判

III 射和文庫蔵本等

再三校合加朱字傍注畢

壺井義知印刷朱

IV 九州大学蔵B本

右壺井義知加傍註畢

このうち、IIが最も一般的な義知の奥書で、「至來」を「到來」とするなど小異はあるが、多数の伝本に見えている。

これらによれば、義知は何度も『菅家須磨記』を書写し、傍注を加えているわけである。それらが門人や知人に貸し出され写されて、他本との校合もされて世に広まっていったのである。

ところで、IIの奥書のある本の上部欄外注は内閣文庫蔵の義知自筆本とは異なっている。すなわち、次のAとDの四箇所である。

A 隆英按、詩齋風曰、東方未明、顛倒衣裳、顛之例之、自公召之（「衣裳をさへさかしまたてゝまうのほる事」に対する注）

B 易乾九五爻曰、飛龍在天、利見大人（「九五象はたれしか上中下のたかひめかあらん」に対する注）

C 論語季氏篇曰、吾恐季孫之憂、不在頻史、而在蕭牆之内也（「あやうき事のまかきのうちよりいつる事」に対する注）

D 論語公冶長曰、宰予晝寢、子曰、朽木不可彫也、糞土之牆不可汚之（「宰予かね心のすさひ」に対する注）

これらはいずれも典拠となった漢籍の本文を示したものであり、義知自筆本にはない欄外注である。

III・IVの本には、文字通り傍注のみで、欄外注記はない（ただし、IVの九大本には「景光曰」で始まる義知注とは別の欄外注が一箇所ある）。

## 2 多田義俊による校合・付注本

神道家であり、浮世草子の作者としても名高い多田義俊（南嶺）は義知の門人であるが、『菅家須磨記』の書写による流布が始まっていた享保十五、六年頃に師に義絶されたという。そんな義俊が『菅家須磨記』の伝来に関わったことを示す独自の情報を奥書に記した本がある。

たとえば、筑波大学蔵A本は本奥書としてIの形の義知奥書を記すが、その後、

菅贈大相国貶ニ太宰府之行至ニ須磨ニ記一卷、感恨不少レ矣。菅氏之緇紳六家、高辻・五条・唐橋・東坊城・桑原・清岡、皆失ニ之ヲ於中古之兵火ニ、不レ傳ニ于子孫ニ也。加賀條某卿得ニ一本於金澤府ニ贈ニ傳寫本ニ各一部諸菅家也。別ニ出レ自レ筑一前一商夫手之本、合ニ彼ノ加賀本ニ大同小異、今在ニ清家文庫ニ也。以ニ両本ニ一過校ニ合之ニ粗如故正本讀者正ニ其添塵ニ。

多田義俊書豊軒

という長い義俊の奥書がある。道真の子孫たる菅原氏の公家は六家に別れたが、どの家も『菅家須磨記』を戦火で失って伝えていなかった。加賀侯某卿が金沢において本書一本を得て、写本を各家に贈ったという。それとは別に筑前の一商夫から出た本があり、加賀の本と比べ合わせると大同小異であった。今その本は清家文庫にある。自分は両本をもって校合して正本と言うべき新たな写本を作った。だいたいそのようなことが書かれている。義知が金沢の川嶋某

から借覧した本というのは、義俊の言う「加賀本」であろう。

これと同様の義俊奥書は、東北大学狩野文庫蔵本、大阪天満宮蔵C本、同D本、広島大学蔵C本などにも見えている（大阪天満宮蔵の二本には、巻頭の見返しや扉に記されているので、奥書ではなく識語と言うべきか。D本は末尾がやや簡略化した形になっている）。

さらに、大阪天満宮蔵D本には、義俊による次のような別の奥書が見えている。

奚疑主人携ヘニ此ノ聖文ヲ一來テ而請フニ朱ヲ於余ニ一勘ニ之ヲ定本ニ一或ヘ加ヘテニ之ニ案ヲ一還スト云 春塘

「奚疑主人」とは奚疑齋と号した京都の書肆風月庄左衛門（沢田一齋、元禄十年（一六九七）―天明二年（一七八二））のこと、「春塘」は義俊の別号である。奚疑齋がこの本を携えてきて義俊に朱を入れることを請うたという。どうやら義俊は、奚疑齋の求めに応じて本文の整定を行ったらしい。

## 3 その他の注釈書き入れ本

大阪天満宮蔵D本には、他の義知奥書を持つ本にはない朱筆の傍書や異文注記などが多く施されており、それらはおそらく義俊の付加したものと考えられる。同本には、林亘櫛なる人物（伝未詳）による書き入れや異文注記も多数存在し、かなり複雑な様相を呈している。末尾には「櫛考」として、「むまやのおさにくしとらする人もありけるを」の「くし」についての考証と一本の奥書を記した紙

を折り込んでいる。亘橋も『菅家須磨記』の注釈的研究に与った人物だと言えよう。

また、同宮蔵のC本にも、他本にない朱筆の注記が多く記されている。同本には「墨校入江昌喜」（前見返し、義俊の識語の後に記す）とあるから、大坂の町人学者入江昌喜（ホセキヨシ享保七年（一七二二）—寛政十二年（一八〇〇））が校合し、墨による注記を書き入れているようだが、朱筆の注記が誰の所作であるかは明らかでない。

さらに、同宮蔵のA本は「菅家集」と外題して、「菅家御傳記」「菅家百首」「菅家筑紫にて御詠」とともに「須磨の記」も収められているものだが、そこにも「私云」「案」などとして上部欄外から行間にかけて四箇所独自の注記を施している。

これらは注釈と言うよりは書写者や所蔵者の研究的な覚え書き（メモ）というのがふさわしいが、全体にわたって複数の他本と校合を行って異文を注記し、本文の整理や解釈に関する注記を施した本に、金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵A本がある。これは金沢藩の漢学者富田景周（トダカゲチカ延享三年（一七四六）—文政十一年（一八二八））による校本で、文化十年（一八一三）九月の奥書がある。そこには、

数本を校して誤りを正し、句讀を加へ、まゝ亦かたはらにかたはかり頭註を副へ、家にかくしぬ。しかれとも、猶文義のわいためかたきところ十に五六に涉れり。やつかれ區々耳觀の學こ  
とに、老て精を究め慮を竭し、またく考索に日子を費するを得

す。幸ひに今や京師諸國好古の学さかむなれば、他日必つはらなる名家完解の善本出へし。こゝろあらむ人はそれを待てとり  
定めて可ならんのみ。

とある（私に句讀点を加えた）。行間に記されている注記はほとんどが本文異同に関するものだが、冒頭近くに二箇所独自の欄外注を記している。かなり整った体裁の本であり、将来の注釈本作成を庶幾して作られた校本と言うことができる。

## 二 注釈本『菅丞相須磨之記』について

### 1 三つの伝本と成立時期

ところが、実は加賀の富田景周よりかなり早く、本格的な注釈書を作った人物がいた。ただし、それが誰なのかはわからない。

『菅家須磨記』の諸伝本の中に、全編に詳細な注釈を施した本が存在することはかつて報告し、そのうちの一本を全文翻刻した（拙稿「翻刻・注釈本『菅丞相須磨之記』」（八戸市立図書館蔵・南部家旧蔵本）」「『広島大学文学部紀要』第五六巻（一九九六年十二月）」。その際には、文化二年（一八〇五）五月に「尚徳堂守拙」なる人物が書写した由の奥書を持つ八戸市立図書館蔵の南部家旧蔵本と、その転写本と見なされる北海学園大学北駕文庫蔵本の二本があり、親本にあたる南部家旧蔵本を底本として翻刻することにしたと述べたが、その後、九州大学附属図書館蔵C本（六五一・カ・一一）も同内容の注釈本であることが判明した。

九大本は、「菅丞相須磨御記」と題し、上下二冊から成るが、上冊が注釈本『菅丞相須磨御記』であり、下冊は「附録」と称し、「菅丞相誕生之事」「天判山告文之事」「法性坊對話之事」「雷鳴之事」「本院大臣病腦之事」「渡唐天神之事」「公忠蘇生物語之事」「虫喰歌之事」「禱神辨」の九編の文章を載せる。そして、下冊末尾に、「寶曆壬申夏四月既望、すなわち宝曆二年（二七五二）四月付けの「洛東散人守黒窟掲厉父なる人物による「後叙」があるのである。そこには、「奴僕イニシ年。故舊ノ手ヨリ 菅公須磨御記ヲ授ル」云々とある。故旧から入手した「菅公須磨御記」が上冊に収めた注釈本そのものであるならば、この注釈本は宝曆二年を遡ること数年以前に成立していたことになる。あるいは、故旧から得たのは注釈本ではなく、それを底本にしてこの奥書の主が注釈本を作成したのであるならば、宝曆二年が注釈本の成立年ということになる。おそらく前者であろうと思うので、この注釈本は十八世紀の半ば以前に作られたと考えてよいであろう。

北駕文庫本の後見返しに貼られた貼り紙には、「元本は應永年中の写本<sup>ニ</sup>而、むしろばみ多く有之候所」云々とあって、元の本は室町時代の応永年間（一三九四—一四二八）の古写本であったと言っているが、信じられる記事ではない。それにしても、本書が初めて一書としてまとめられた『菅家須磨記』の注釈本であることは疑いない。

三本の本文を比較すると、九大本には注釈文の漢字に他の二本にはない片仮名の振り仮名が多く付されているのが特徴的である。そ

して他の二本が書名を「菅丞相須磨之記」としているのに対し、九大本は「菅丞相須磨御記」とあって少し異なっている。

## 2 注釈の特色と『源氏物語』への傾倒

本注釈本の形式は、全体を二十八の小節に分け、本文（振り漢字を多く施す）の後に約二字分下げて注釈文を記すというものである。注釈の内容は、多く文意の解説であるが、事件の史実や、登場人物、典拠ある表現の考証なども随時行っている。ただし、その考証はあまり微に入り細を穿ったものではなく、簡明を旨としているようである。文意の解釈においても、用語の辞書的な説明はほとんどなくて、表現の細部や文法にはあまりこだわらず、とにかく難解な本文をわかりやすく翻訳して見せているといった感が強い。

典拠としての『易経』や『論語』などには触れているけれども、漢籍の引用は最小限にとどめ、一方、『源氏物語』や『徒然草』などの和文に積極的に行及しているのが目立つ。おそらく著者は、儒学・漢学の専門家ではなく、和学者であると考えられる。天神信仰や神道への傾倒も窺われないので、神道家ではなさそうだ。

何より注目されるのは、その『源氏物語』への深い傾倒ぶりである。第23節において、「君が住む宿の梢を行く行くと隠るるまでに返り見しはや」という道真の著名な和歌が載るのに関して、次のように記す（引用は、前掲拙稿の翻刻による。以下同じ）。

又、源氏物語また柱（ましら）の巻に云、「御車ひき出てうちかへり見る

も、またはいかてかはみんとはかなき心地す。梢をもめとゝめて、かくるゝまでそかへりみ給ひける。君かすむゆへにはあらで、こゝらとしへ給へる御すみかのかてかしのひところなくはあらん」と有。是は、髭黒の大將、玉葛の君を迎へ給ふにより、北の方、兄の宮式部郷(ノミ)の御方へ帰り給ふ時の事也。菅公の「君かすむ」の御詠を引合たる也。菅公の御愛は、君達の御愛恋をおほしてよみ給ふなり。源氏物語に「君か住むゆへにはあらで」と書しは、髭黒の大將になこりをおもふゆへにはかへり見されとも、年月をおくり給ひし宿のなこりをおしみ給ふと、本哥をとりなをしたる也。

と、『源氏物語』真木柱の巻にある同歌を引歌に用いている場面を詳しく解説している。「君が住む」の歌が『拾遺抄』『拾遺集』に道真作として採られていることなどは全く言及せず、『源氏物語』に引歌として使われていることをこれだけの字数を費やして語るのである。注釈本の作者がいかに『源氏物語』の愛好者であるかを示すものである。『菅家須磨記』本文の読解にはあまり役立たないこのような説明を長々と記したことはさすがに引け目を感じたと見え、続けて「此所に用なき注解なれとも、菅公左遷のおもむきを源氏に模したる准據をしるすなり」との断り書きをしている。つまり、紫式部が『源氏物語』の真木柱巻を書くにあたって、道真左遷時の状況を下敷きにしたのだという、准拠論を展開しているのである。

真木柱巻にさえ道真の故事を准拠として用いていると主張するのだから、当然須磨・明石両巻の記事においても道真左遷事件を准拠として用いることは力説している。

まず、第26節において、菅公一行が須磨に近づくにつれて、海が荒れ、雷鳴が轟いたりした場面に関して、

此事、源氏物語須磨の巻に、光源氏の君、させる罪なきに、官位を解給ひ、直人となりて、津の国須磨と云所へ左遷し給ひし時、三月一日、上巳の祓に渚にいて給ひ、御身の罪なきよしを神に告給ひし時、俄に四十月吹、海つら闇く、風雨頻りにして、それより十餘日、かみなり・風雨やまさりし事有。此菅公の事を模して書たる也。

とあって、須磨巻末尾の風雨・雷鳴のくだりはこの道真の故事に倣って書いたものだとする。

また、続く第27節では、橘季祐という現地の男が漢詩に関心を持っていて道真との邂逅を喜んだので、道真は一編の詩を作って「くちつからすしてあたへ」という場面について、

源氏須磨の巻に、「驛の長にくしとらする人もありける」と書り。「くし」とは、口詩・句辞など書て、書付すして口つからとなふるをもいひ、又、全章ならぬ聯句を云。是又、紫式部、源氏の君の事を書たるに、菅公の左遷の事を下にふまへて書たる也。すへて源氏物語は、寓言なれとも、一言一句も證なき事は書しるさず。いづれもその時代の事実をふまへてしるせし也。

さるにより、悉く皆寓言なれとも、源氏に出たる事は、皆実證とす。まことに甚妙の書、吾日本の至宝と、前修も賞奨し給ひしこと、宜也。故に、此須磨記を見奉るに、菅公左遷の実は、源氏物語を見て准知すへし。

とも書いている。「くし」の語の解釈については『源氏物語』古注釈書の影響がある（『紫明抄』『河海抄』等は「口詩」、『細流抄』『湖月抄』等は「句詩」とする）が、須磨巻の「驛の長にくしとらする人もありける」というくだりは菅公左遷の時の故事を踏まえて書かれたものだという。そして、「悉く皆寓言なれとも、源氏に出たる事は、皆実證とす」とまで言い切っている。『源氏物語』に記される話はすべて典拠や准拠があるのだと言うのである。だから、この『菅家須磨記』を見ていると、菅公左遷の際に生じた事実は、逆に『源氏物語』を見てなす知らぬことができると言っている。そこまでは言い過ぎだろうが、注釈者にとっては、『菅家須磨記』は『源氏物語』の准拠論のための一資料だということになる。かようにこの注釈本の著者は、源氏研究者かつ讃仰者の視点で『菅家須磨記』を見つめているわけである。

『菅家須磨記』を道真の自作と信じる立場に立てば、紫式部が『源氏物語』を書くにあたって典拠とした菅公の故事はこの『菅家須磨記』であるとも言いうる。しかしながら、どうも本書の注釈者の立場ははっきりしない。「菅公左遷のおもむきを源氏に模したる」と言ったり、「此菅公の事を模して書たる也」と言ったり、「菅公の

左遷の事を下にふまへて書たる也」と言ったりしているけれども、『菅家須磨記』そのものに拠ったとは言っていない。どうやら、注釈者は道真自作を信じていないのでないかという気がする。本書末尾には、「此須磨の記は、都への御かたみにかりや姫に書しるしあたへ給ふと見へたり」とあって、須磨で孫娘のかりや姫と別れるに際し、この作品を著して形見に与えたように見えると言っているのだが、それも、道真が史実として書き与えたものであるというよりは、そのように見えるように、そのような体裁で書かれていると言っているように受け取られるのである。そして、『源氏物語』を絶賛する口ぶりに比して、道真に関しては抑制のきいた穏やかな筆致で記されているところにも注釈者の嗜好が表れているような気がするのである。

### 三 岩田友晴注解『菅公遺著 須磨記』について

#### 1 岩田友晴の著作と人物像

ところで、十八世紀の末頃には、もうひとつの本格的な『菅家須磨記』の注釈書が著されている。それは、明治三十五年（一九〇二）に刊行された岩田友晴注解『菅公遺著 須磨記』である。同書は、宮地又太郎（葉天）によって東京の菅公須磨記発行所から刊行された（すなわち私家版ということであろう）活字本であるが、原本は、寛政四年（一七九二）九月の自序を持つ岩田友晴（生没年未詳）の著作である。享和元年（一八〇一）正月の友晴による「凡言」があ



り、文化六年（一八〇九）二月の秀穂舎主人（玉田永教）の序文が添えられているから、寛政四年に完成し、文化六年までに形態が整えられた（あるいは出版が念頭にあったのかも知れない）ものと考えられる。「凡言」の後に宮地葉天による「本書の刊行に就て」という文章があり、それによれば、友晴の子孫である岩田鬼一郎なる人物が先祖の著作として葉天に一本を見せたのが始まりだと言う。

読みもてゆくに、註釋者自らは、先づ深く菅公の威徳に歸依し、時に偏見と思はるゝふしもなきにあらねど、不學なる吾等には批判すべくもあらず、只識者に質し、世に紹介するの値ありとこそ覺ゆるのみ、

ということで、成立後一世紀ぶりの刊行となつたのであつた。書名に「菅公遺著」と冠することく、著者の友晴はもとより、葉天も『菅家須磨記』を道真の自著と信じていた。葉天は、

近時漸く學者によつて、菅公の事跡を討究されたる、多くの著述も見ゆれど、本書の世に在るを漏したるはいかにぞや、彼の偽作なりといひけるを信ずべからんには、なほ詮鑿の要あらんに。

と言ひ、

會つて本居宣長大人の偽作と謂ひしも何の據りところありてや、本書文辞拙なしといへる或は然らんも、菅公の著述に此體のものなし、彼是對照の便なくんば、何を以つて菅公の筆にあらずといふか、唯恐るゝは幾たびか謄寫の際、多くの誤謬を傳

へたるなきやの一事とす。

と言ふ。本書は、明白に道真の遺著として尊崇する気持ちから世に出されたものであつた。

著者の岩田友晴については伝記を詳らかにしないが、葉天の記すところでは、

もと洞明先生岩田友晴大人は醫師にて、前に加州侯に仕へ後に勢州に移り、龜山藩典藥頭に任せられ、韻儒たりきと聞くのみ、とある。「本書の末尾に自著目録の存する次の如し」として、「岩田洞明先生著書目録」を掲げてあるが、そこには全百十九点に及ぶ著書名が並んでいる。大変な多作の著述家であつたわけだ。その中には、本書とおぼしき「菅公須磨記解 全二冊」もあり、他に道真関係の著作には「菅家百首解 全三冊」がある。葉天は、

茲を以て大人は、いかに博覽強記の人たりしかは知るに難からず、今にして反す々も惜むべきは、斯の如き數多の著述をして、後の心なき人のために、壁襖の下張に用ひ捨てたりといふも是非なければ、本書と共に篋底に存せし數冊は、之を皇典講究所へ納付せしめたるは、せめてもの心遣なりし。

と言つているから、これら多數の著述はほとんど日の目を見ることなく失われたようである。『国書総目録』の著者別索引を見ると、岩田友晴（友晴）の著作として、「音韻百転法」「菅家百首解」（文化元）「神字遺習」「神字辨」「神授音戦陣図」「籤蓋奇字考」の六点が載っている。「菅家百首解」のみ慶應大学蔵、他の五点はいずれ

も國學院大學の現蔵になる。伊勢亀山藩にあって、医業のかたわら神道系の国学者として多数の著述をなしながら、その業績はほとんど知られることのなかった人物であるようだ。没後に唯一刊行された著作がこの『菅公遺著 須磨記』であるが、これとてどれほど人の目に触れた本であるかはなはだ心もとない。

文化六年（一八〇九）二月付けの序文を寄せている秀穂舎主人玉田永教（宝暦六年（一七五六）―天保七年（一八三六））は、著名な神道家で、阿波の人だが、京都に出て、はじめ垂加神道を学び、後には吉田神道を究めたという（『日本古典文学大辞典』）。「秀穂舎」は家塾の名。道真関係の著作には「菅家世系録」（文化六年）がある。葉天は永教を「岩田友晴大人の高足」と言っている。それが正しいなら、永教は友晴の弟子ということになる。ただし、この永教の序文は奇妙な文章で、「須磨記」を感動的な文章と讃え、これを偽書とする宣長を非難し、「越の中國に世々の干城たる成田氏観音」なる人物の菅神崇拜を讃える内容で、岩田友晴については何も触れるところがない。成田氏観音が「菅神の睦月廿日都を立出たまひしをしたひ、文化六のとし其月日をたかへす、須磨にかりの舎をもとめてしかすかの文書の埋れんをかなしみ、道に游の人に弘む」とあるのは、文化六年の奥書を持つ成田長孝（梅甫）の書により同七年に刊行された版本『菅家須磨御記』のことを言っているようである。察するにこの序文は、友晴の著作ではなく梅甫の書に向けて書かれたものとおぼしい。それがどうして本書に載せられているのかは不

明である。

さて、寛政四年（一七九二）九月付けの友晴の自序には、本書著述の経緯が簡明に記されている。漢字を現行の字体に改め、濁点、句読点を施して引用する。

近ごろ松岡玄達があらはせる結駝録を求む。ふるき事さまざま書集めたるものなり。ある時由良時諶に見せければ、読終りて語りけるに、我家に秘蔵する菅公左遷の節の記とて一卷あり。

何と題せる名なし。かの書中に白大夫のことを記して、菅相丞筑紫へ流謫の時、須磨記一卷を作れり。京より須磨までの事を記す。其中に白大夫は伊勢の御師なり。上京すればかならず菅公の家に留止せり。これによりて考ふれば、これぞ須磨の記なるべしと篋の中よりとり出して見せぬ。つゝしみて捧読に、古きことの葉のみ綴りたまひたれば、たやすくその深意を得がたし。只惜むべくは、本書筆の運びつたなく、ついであやまり多かるやうにおぼゆれども、我さへに及ばぬわざなれば、先づ句読を点じ、須磨記と題しぬ。学業のいとまに、其言葉をかこれの書より稽へ、なをしも解ざることほゆく／＼同志にはからんと思ふのみ。

これによれば、友晴が底本としたのは由良時諶（よしかたとき）の所蔵本であったようである。由良時諶（明和四年（一七六七）―天保元年（一八三〇））は、伊勢亀山藩士で、曆算家として知られ、藩校で算学の指導にあたった人物だという（『国書人名辞典』）。「凡言」には「一本

紫墨ニテ加筆ノ本アリ、其違メヲ今コ、ニ紫書ト擧ルナリ」とあり、また、須磨在住の前田某所蔵の「菅家須磨記 従二位實積卿筆」なる本も見ている（成田長孝の紹介によるらしい。このあたりに友晴と梅甫の接点がある）ようだから、友晴は底本のみならず、他本も参照して本文を検討している。「紫書」については頻繁にその本文や付訓などに言及されているが、おそらく先に挙げた壺井義知奥書Ⅱ系の傍書・欄外注を持つ本であると思われる。なお、自序冒頭に言及された松岡玄達（寛文八年（一六六八）—延享三年（一七四六））は京都の医家で、その著『結眊録』は宝暦九年（一七五九）刊の随筆である。

## 2 岩田友晴注解の特色

本書も、注釈本『菅丞相須磨之記』と同様、本文を短く区切つて掲げ、その後には二字ほど下げて注釈文を記している。『菅丞相須磨之記』では二十八の小節に分けていたが、本書はその倍以上の六十八節に分けており、よりこまかく区切つている。

次に注解の内容であるが、葉天が「博覧強記の人」と評した通り、友晴は実に博引旁証ぶりを見せており、かなり詳細な注釈となっている。引用・言及された書名・文献名は多岐にわたって豊富で、出現順に挙げると、次のようである。

日本書紀 和名抄 百人一首 和漢名數 催馬楽 三才図會  
 孝経 大成本紀（道真著作） 類聚国史（道真著作） 古事記 詩経

易 論語 伊勢物語 紹運録 神社啓蒙 続日本紀 新撰萬葉集 孫姫和歌式 神代音法 宗徳経 北野事跡 日本釋名 舊事記 結眊録 菅原實記 菅原傳習手習鑑 子晋論 麗藻 三代實録 延喜式 古今集 萬葉集 大和物語 金花百人首 列子 菅家百首（道真家集） 後按 文選 舊事本紀 拾芥抄 今昔物語 増補本紀（道真著作） 倭爾雅 空穂物語 倭麿

最も多く引用されているのは『日本書紀』で、それは友晴が神道家であることにもよるのだろうが、むしろ古訓を古代語の用例として挙げるものが多く、『和名抄』の多用も同様である。また、『和漢三才図會』も頻繁に引かれている。とりわけ京都の地名など、地理的な考証の材料として用いられている。友晴は加賀・伊勢に住んだというが、京都の地理には相当詳しく、居住したことがあるのではないかと思われる。

和文の書物も和歌・散文ともに引用されているが、特に目立つのが『伊勢物語』の引用である。『菅家須磨記』の用語を説明するのに『伊勢物語』の用例を多用するのは、友晴が両書に何らかの共通する性質を感じ取っているからではないかと思う。逆に『源氏物語』には一切触れるところがないのは、文章に共通性を認めないゆえであるが、関心も薄かったのに違いない。先の注釈本『菅丞相須磨之記』の場合とはまったく対照的である。

語彙・史実・典拠などの考証はなかなか緻密で、納得できるものが少なくない。ただし、付会の説と思われるものも時々まじる。「凡

言」の中で、いきなり書名について、

須磨記ト申ハ、住マヌ氣ト云意ナリ、又清マヌ氣トモ云意アリ、  
或ハ清眞ノ記ト云義カ、

と記すのはいかがかと思われ、また、開卷早々冒頭の「昌泰ふたは  
しらにあたれる」について、

昌ヲ時平公ノ女襄子ニ属シ泰ヲ宇多帝ニ属シ二柱ト見ルナリ

と言うのはともかくも、

二タ柱ハ二走ナリ、二速ト云義ナリ、フタバシラハ今所謂二年  
ナリ、實ハ二走ナリ、年ハ疾ナレバ走ト云フ、

などと説明されると、どこまで本気かと疑いたくなる。葉天が「時  
に偏見と思はるゝふしもなきにあらねど」と言っているのはこのよ  
うなところをさすのであろう。しかし、これをもって本書全体を見  
るべき価値のないものと考えるのは早計である。

ただ、本書は考証を好むあまり、文章の読解という点ではあまり  
読者を導いてくれないのは事実である。先の注釈本『菅丞相須磨之  
記』が文意の解説中心だったのと大きく異なるところである。

もともと文芸批評的な視点は少ないのだが、末尾の一文に関する  
言辭は注目すべきである。須磨において見送りに同行してきた孫娘  
のかりや姫を都に送り返したことを述べた後、「さだめなき身ふたゝ  
びのたいめんはかりがたさかきつけぬべきに、筆みじかければもら  
しぬ」と本文は結ばれる。これについて、友晴は、

「さだめなき身」ハ定メナキ身ナリ。筑紫太宰府ノ帥ニ成リ玉

フ上ニモ御身イカニナラント歎ノ情至テ悲シ、「ふたゞびのたい  
めんはかりがたさ」トハ再ビノ對面計リ難キナリ。此二句ハ此  
記ノ骨子ナリト知ルベシ、

と言う。そして、

此末ノ二三句ニテ千萬ノ餘情ヲ内ニ含蓄セリ。誠ニ殊勝ノ妙文  
ナラズヤ、

と述べるのは、『菅家須磨記』の文藝的価値を評価した言辭として、  
すぐれたものであると言えよう。

### 3 「後按」について

先の引用書目一覧にも掲げたが、本書では、第51節になって初め  
て「後按」なる文献の引用が現れ、以後頻繁に引かれている。

後按ニむくつけハ向衝ニテムキツクナリ

後按ニ弾ハ糾ナリ効ナリ

後按ニコノ彈正尹ハ菅公ノ師ナリ

などとあって（いずれも36頁）、「後按」には語彙や人物に関する注  
釈が書かれてあったことがわかる。すなわち、「後按」は『菅家須  
磨記』の注釈書であることが想像されるのである。友晴はそういう  
書を参照していたのだ。いったいいかなる書物なのであろうか。

東海大学付属図書館蔵桃園文庫C本は外題に「須磨記後案」とあ  
り、延享四年（一七四七）の奥書を持つ『菅家須磨記』の写本14丁  
に、「須磨記後案」と題する罫紙15枚に書かれた文書を合綴したも

のである（桃園文庫には、この「須磨記後案」だけを独立させて一冊とした写本も別に存在する）。「後案」には、「明治九年北野祭日」付けの渡忠秋（文化八年（一八一）—明治十四年（一八八））の序文があり、それによると、師匠である香川景樹（明和五年（一七六八）—天保十四年（一八四三））が、晩年重病の床で、子の景恒と自分に言い遺した言葉に（適宜句読点を付して引用する）、

菅原のおとゝの須磨記といふ物を、ちかごろの物しり人ら後世の偽書なりと見なしたる説ともありて、世中大かた信む人すくなくなりぬるはいとも々々あたらしき事なり。おのれははやくより御自記の物なりと見とめてあれは、その辨かきあらはずへくおもひつゝ、つひにえはたさざりしかとも、此記はゆめ々々疑ふへき物にあらずと心得へし。そのくはしき事は今はの息のしたには……

と言つて後は続かず、「須磨記」が偽書ならざる根拠については聞けずじまいになってしまった。そこで、景樹の意を汲んで、自分は『源氏物語』の須磨巻から道真左遷の故事を引用・拠り所としたと思われる箇所を抜き出すことにしたというのである。

本体には、『湖月抄』発端の引用と、須磨・明石巻の本文抜萃、そして「近世諸家説」として、義知奥書、桂秋齋『ちかや草』、宣長『玉勝間』、伴蒿蹊『国文世々の跡』、尾崎雅嘉『群書一覽』のそれぞれ「須磨記」に言及した箇所の引用から成っている。

香川景樹の『菅家須磨記』に対する評価がわかって興味深い書だ

が、ずっと後の明治期の成立であり、友晴が引いているような語釈はひとつも含んでいないので、この「須磨記後案」はまったくの別ものである。なお、『桃園文庫目録』には「須磨記後案」を香川景樹著とするが、先のような内容なので、景樹の著作ではなく、門人の渡忠秋の編著とすべきである。

『国書総目録』によれば、香川景樹著という「須磨記後案」が京都大学にも所蔵されている。「穂井田忠友桂園翁二質問の付」とあるように、同じく門人の穂井田忠友（寛政四年（一七九二）—弘化四年（一八四七））の質問に景樹が答えた体裁の書の一部として書写されているのだが、実は明治九年渡忠秋の序文を持つ、桃園文庫本と同じ内容の本である。友晴が見た「後案」が何なのかについては今のところまったく不明である。今後さらに追究したい。

### おわりに

『菅家須磨記』の注釈的研究は、この書の存在が世に紹介された時からすでに始まっていたと言つてよい。ただし、近世においては、研究の成果は主に写本の行間や欄外への書き入れという形で残されたため、広く識者の目に触れるところとはならなかった。早くに作られた二種の注釈本も、世に流布するまでの読者は得られず、長く忘れられた書物となった。それは明治後期の『菅公遺著 須磨記』の刊行後もさして変わらなかった。

近年になって、偽書と呼ばれる作品にも次第に研究の光が当てら

れるようになり、「日本古典偽書叢刊」全三巻（二〇〇四年―二〇〇五年 現代思潮新社）のような注釈叢書の出版もなされた。『菅家須磨記』もその中に収められ、近代になって初めての注釈書が刊行された（千本英史氏校注）。それまで読もうにも読めない状況だった『菅家須磨記』が手軽に読めるようになったことはまことによろこばしいことだが、まだ十分に解読できていない憾みも残る。もちろん紙面の制約があるのでいたしかたないのだが、それまでに先人が積み重ねてきた注釈的研究の成果があまり取り込まれていないように見えるのも残念である。現代の視点で注釈を行うことを基本姿勢としつつも、先人の努力の跡は十分に吟味した上で取り入れるべきものは取り入れる必要がある。そのためには、諸伝本を精査し、書き入れや注記の類を収集・整理するというような地道な作業がまた必要だと思われるのである。

〔付記〕本稿における『菅家須磨記』の伝本名は、拙稿『菅家須磨記』の基礎的研究・序説―諸伝本とその奥書について（付・架蔵本翻刻―）（『広島大学大学院文学研究科論集』第六七巻（二〇〇七年十二月））に掲げた名称によった。

なお、本稿は、国文学研究資料館の基幹研究A「王朝文学の流布と継承」における共同研究の成果として執筆したものである。伝本の調査・閲覧に便宜を計ってくださった国文学研究資料館、国立公文書館内閣文庫、九州大学附属図書館、金沢市立

玉川図書館、大阪天満宮文化研究所、東海大学付属図書館、京都大学文学研究科図書館、その他関係機関の皆様は厚く御礼申し上げます。また、『菅公遺著 須磨記』は、国立国会図書館ウェブサイトの「電子図書館」「近代デジタルライブラリー」において公開されている画像を使用した。

## Development of the Annotated Editions of *Kanke-suma-no-ki*

Yoshinobu SENO

*Kanke-suma-no-ki* is a writing dealing with travels which depicts Sugawara Michizane's mind after he lost his position and was left for Dazaifu and also the behaviour of people aside while on the journey to Suma. It is not a writing by himself but a pseudo graph made in the Edo period. It is, however, in the guise of Michizane's writing so the archaic expressions are used, which makes it hard to understand. Therefore, the scholars made efforts to read the book. There are many manuscripts with various kinds of notes between the lines or on the margin of each page. For example, Tsuboi Yoshichika made marginal notes for the writing. In the end of the Edo period, two kinds of full-fledged annotated books were written. In this paper, focusing on the two annotated books, I will trace the annotations of *Kanke-suma-no-ki* in the Edo period.